

卒業五十周年を祝す

人の一生で最も多感な時期を過ごされた母校を卒業され、半世紀の大きな節目を迎えられましたこと、誠にご同慶に堪えないところでございます。

皆様に於かれましては、ますますご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。また、平素は同窓会事業運営に対しまして、温かいご支援ご指導を賜っておりますことに厚く御礼申し上げます。文武両道の薫陶を賜った村上昭五郎先生の後任として、不肖私が石桜同窓会長を拝命し、貴同期会の皆様をはじめ、数多くの先輩・後輩の方々にお会いしてまいりましたが、同窓生の強い絆と、母校に対する感謝と期待感が、ひしひしと伝わってまいります。

私ども九桜会（新九回生）では、九月十日、傘寿と卒業60周年を祝う会を開催致します。大半が寅年生まれであり、丑・寅の守り本尊であります虚空蔵堂に役員数名が代表して参上し、前ご住職・池口杜孝先生に家内安全・所願成就のご祈禱をお願いすることになっております。

私は、昭和二十六年に岩中に入学し、三十二年に岩高を卒業しました。高二の時に野球部が甲子園出場を成し遂げ、同期の親友でピッチャー村川、沢野、佐々木君が活躍しました。地方予選の下馬評では、劣勢でしたから、一回戦で敗退するだろうと予想しておりました。あの当時庭球部と野球部は、春休みに毎年のように陸前高田松原のテニスコートと野球グラウンドで合宿練習をした関係で、先の三人と同期のテニス部のメンバー四人は、甲子園出場への快挙を成し遂げた年の夏休み、高田松原に海水浴に行く計画を立て、先発隊の私ども四人は、やがて負けて合流する日を待ち侘びておりました。しかし意に反して一回戦を突破、二回戦も勝ち進みました。みんなは驚き、遊んではいけないと、テントをたたんで応援のために帰ってきたことが、懐かしく思い出されます。先日、久しぶりに卒業アルバムを取り出して拝見しましたが、編集後記に次のような文章が記載してありました。「ここに集えし百三十の若人、喜びあり、悲しみあり、人それぞれの生き方があるだろうが、社会の一線に立つときも、あるいは人生の中半終え皺よる顔に老眼鏡の光るときも、どうかこの冊子を忘れないでください。時々でよいから一『ああ、俺にもこんな時代があったのか』と忘却の彼方を手探りで求め、旧き友の面影、盛岡の北に存した母校をおもいだして下さい。――」今では同期百六十三人中、五十名もの多くがすでに鬼籍に入っており、母校に学んだ喜びと誇りと思ひ出を語り合うことも叶わなくなってしまう。

昨年、母校創立九十周年を迎えましたが、同窓会の発足会は、旧三回生が卒業した、昭和八年八月、母校に於いて開催され、その時の卒業生は約三百名だったそうですが、現在一万五千名を数えるに至っております。創立百周年に向けて在校生の奮起は無論のこと、母校と同窓会が一丸となって、母校の新しい改革と発展に全力を尽くし、人材育成の夢を実現しなければなりません。

私は、八月十九日開催の石桜同窓会総会を持ちまして、会長を退任することになりました。要職に就任してから十二年間、皆様の絶大なるご支援、ご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。母校のさらなる躍進のため、尚一層ご協力ご支援の程お願い申し上げます。

結びに、皆さんの一層のご活躍とご健勝をご祈念申し上げお祝いの言葉といたします。